令和6年





令和5年度は高温で経過し、高温性の病害として紋枯病などが多発しました。令和6年度の紋枯病は発生 期がやや早く、発生量はやや多いと予報されていることから注意が必要です(北海道病害虫防除所 病害虫 発生予察情報・長期予報より)。

紋枯病は、茎(稈)を枯らし倒伏を助長します。また、紋枯病によく似た病斑をつくる、疑似紋枯症(赤 色菌核病ほか)もあります。それらは、茎(稈)にできた菌核がほ場に残ることで翌年の発生源になるので、 前年度の発生を踏まえた防除判断が必要です。

- ■前年の成熟期に、防除要否の判断基準に達した圃場では防除を行いましょう。
- ■来年度に向けても、本年の成熟期に両病害の被害程度を確認しましょう。

○紋枯病:

高温性の病害で、茎(稈)を枯らして弱めます (写真1の①)。茎(稈)にできた菌核(写真1の ②)が圃場に残り、翌年の発生源になります。





紋枯病の病徴と菌核(中央農試 野津原図)

○疑似紋枯症の赤色菌核病:

赤色菌核病は紋枯病と類似する病斑です。重症株は 茎(稈)を枯らして弱めます。病斑上には黒い菌核 は形成されず、収穫時期になると葉鞘の内側にオレ ンジ色の菌核(写真2の③、④)が形成されます。





写真2 葉鞘に形成されたオレンジ色の菌核(赤色菌核病) (中央農試 野津原図)

紋枯病と疑似紋枯症(赤色菌核病ほか)の対策

前年の成熟期に 防除要否を判断

調査:10株×5ヶ所 (圃場の縁~内部) 判定:成熟期の発病度40

次年度対応



年

度

■防除対策の選択

A 紋枯病と赤色菌核病の両方が発生

水面施用剤(フラメトピル粒剤、シメコナゾール粒剤)を使用

B 紋枯病が単発

茎葉散布 (無人ヘリ または 地上散布)

[薬剤は チアメトキサム・アゾキシストロビン水和剤F またはフルトラニル水和剤Fの効果が高い

散布時期は出穂20日前と出穂期の2回散布]

止葉葉鞘まで紋枯症状が散見される程度に達したら、翌年は育苗箱施用剤で防除しましょう

*使用薬剤が不明な場合は普及センターに相談して下さい

米 No. 2

2024年6月

ばか苗病菌の胞子飛散を防ぐ

- ■ばか苗病菌の胞子は遠くまで飛散するため、水稲の種子生産に甚大な影響を及ぼします。
- ■採種圃場だけではなく、周辺圃場も含めてばか苗病の発生には注意が必要です。
- ■種子を保管する納屋や育苗ハウス周辺に稲わら、籾殻が残らないよう清潔にします。

本田での伝染と処理方法

- ○本田での症状:発病個体は徒長・黄化し(写真3)、出穂期頃までに枯死し、株元には無数の胞子を作ります(写真4)。
- ○**胞子の飛散**: 胞子は数百メートル飛散するとされ、出穂・開花期の健全籾に付着すると、その籾は汚染種子として翌年の発生源となります。





写真3 育苗中の発病個体

写真 4 枯死株に作られた胞子

○罹病株の処理方法:

- □出穂までに、枯死前の罹病株を株ごと抜き取りましょう
- □疑わしい徒長株・黄変株も抜き取りましょう
- □抜き取った株は、圃場外に搬出し土中に埋める等、適切に処分しましょう

いもち病対策を万全に

感染源を圃場外へ搬出

○処理方法:補植用の残り苗や代かき後にすくい上げた残さ物等は圃場外で適切に処分しましょう。

早期発見のポイント

○水田内見歩き調査時期: BLASTAM(ブラスタム) を活用して、効率的に調査 しましょう。



BLASTAM (北海道病害虫防除所)

- □感染好適日の約1週間後が調査適期
- □好適条件が連続する場合は要注意
- □葉いもちを発見したら直ちに茎葉散布

○見歩き調査場所・方法:

- □いもち病が発生しやすい場所
 - ・前年の発生場所
 - ・葉色が濃い場所
 - ・風通しの悪い場所
- □10mを4か所程度、稲株をかき分け、下葉を 重点的に観察しましょう

耐性菌の発生に注意

■Qol剤では耐性菌が確認されているため、年1回の使用とし、体系防除時は、作用性の異なる薬剤と組合せます。また採種圃および周辺圃場では使用を控えましょう。

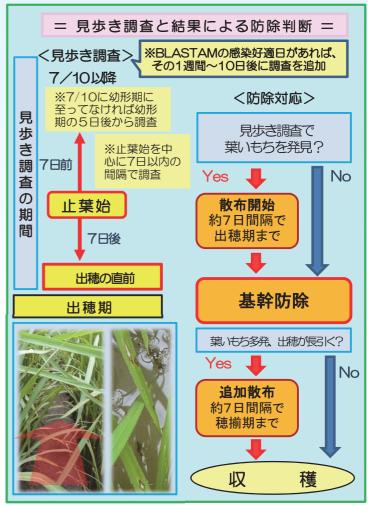


図1 いもち病の見歩き調査と防除体系

イネミギワバエ(イネヒメハモグリバエ)に注意

- ○被害症状:本害虫は稲の水面に接した浮き葉などに好んで 産卵する。ふ化後の幼虫は葉身に食入して葉肉を食害し、 葉が溶けた様になる。食害がひどいと枯死することもあり
- **〇発生状況**:イネカラバエと同じく道内の一部で被害が確認 されていましたが、これまで発生のなかった水田において も発生経過に注意が必要です。
- **〇防除**:発生が月立つ様であれば、登録のある薬剤を選択し ましょう。移植後の浮き葉が産卵対象となりますので、極 端な深水や徒長苗に注意しましょう。また、多発時には茎 葉散布を実施しましょう。

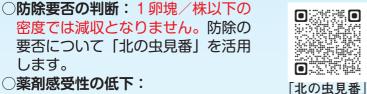


イネミギワバエの①卵、②食害被害の様子、③ 葉身を食害する幼虫

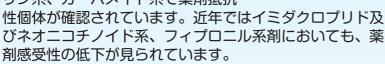
イネドロオイムシの防除要否判断

(北海道病害虫防除所)

○防除要否の判断: 1 卵塊/株以下の 密度では減収となりません。防除の します。



イネドロオイムシでは、過去に有機 リン系、カーバメイト系で薬剤抵抗



○効果的な防除と薬剤選択:

抵抗性個体が確認された地域では、作用性の異なる薬剤に よるローテーション防除を実施しましょう。その他の地域 では、前年までの防除効果を再検討した上で、薬剤を選択 しましょう。



イネドロオイムシの①卵塊、②食葉被害の様 子、③成虫

イネキモグリバエ(イネカラバエ)



イネキモグリバエによる被害 (中央農試 下間 原図)

- ○被害症状:本害虫は稲の葉裏や葉鞘に産卵し、ふ化後の 幼虫が茎内に潜入します。幼虫は抽出前の葉や穂を食害 し、写真7のような被害をもたらします。
- **〇発生状況**:これまで道南地方、後志地方の一部で被害が 確認されていましたが、近年では、道央の水田において 本種による被害の発生が認められています。これまで発 生のなかった水田においても発生経過について注意が必 要です。
- **〇防除**:発生が目立つ様であれば、次年度に登録のある薬 剤を選択しましょう。

モニタリングを利用したカメムシ防除

- ■「出穂期」と「出穂から7日後」は基幹防除です。基幹防除以降は、モニタリング調査(すくい取り・フェロモントラップ)により防除の要否を判断しましょう。
- ■水面施用剤や残効の長い成分を含む剤を使用することで、防除回数の削減も期待できます。

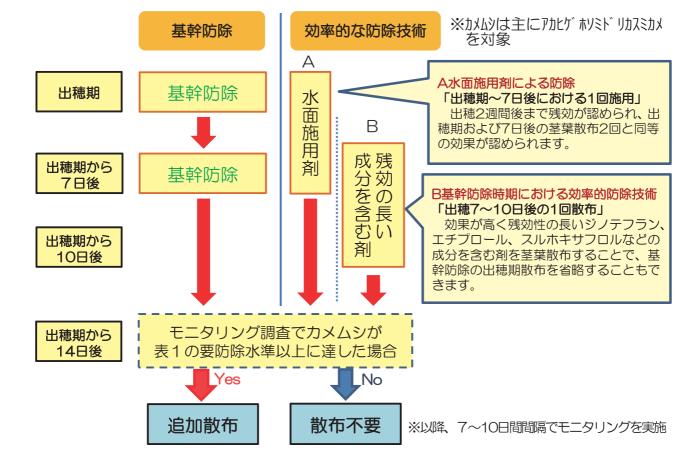


図2 モニタリングに基づくカメムシ(アカヒゲホソミドリカスミカメ)防除の要否判断

表 1 割籾歩合ランクに対応した追加防除の要防除水準

(「R6年度北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」より)

割籾歩合		要防除水準	
司級少日 ランク ¹⁾	主な品種2)	20回振りすくい取り	フェロモントラップ
フン グリ		捕獲虫数	捕獲虫数
少	きたくりん、吟風	3 頭	3)
やや少	ゆめびりか※	- 2頭	_
中	きらら397		2. 2頭/7日間
やや多	ななつぼし※	1頭	_
多	ほしのゆめ		1.2頭/7日間



注3) ーはデータが無く要防除水準を設定できない。



写真 8 フェロモントラップに誘殺さ れたカメムシ

農薬散布上の留意点

- ①農薬散布に当たっては、示されている使用基準や使用方法、注意事項等を確認の上、適切に使用しましょう。
- ②散布前は服装、使用器具などの確認・点検を事前に行い、散布時においては接触や吸引を回避 するよう心掛けましょう。
- ③通常散布では登録されていても、有人へリコプター、無人へリコプター、速度連動式地上液剤 少量散布機などの散布方法では、登録の無い場合もありますので注意しましょう。
- ④農薬の飛散防止のため、粉剤の使用を避け、液剤や粒剤などで対応しましょう。
- ⑤周辺に他作物や有用生物(家畜、ミツバチ等)がある場合は、薬剤散布方法・時間帯などについての事前連絡等に 配慮しましょう。
- ⑥農薬の散布はミツバチの活動が盛んな時間帯(午前8時~12時頃)を避け、早朝や夕刻に実施しましょう。